国境を越える地域協力の現状
―延辺地域と北朝鮮の経済関係を中心に―

金 向東

1990年前後、ポスト冷戦の到来により、北東アジアにも地域性を持つ「地域経済圏」の可能性を探る議論が急速に台頭した。ロシア極東地域の多くの天然資源と中国の豊富で安価な労働力、北朝鮮の天然の良港、日本と韓国の資本・技術など、北東アジアには経済発展に必要な条件が揃っており、インフラ整備さえ整えば地域内の経済的補完関係を顕在化させることが可能であるという考えである。其の代表的な例が「図們江地域開発計画」であった。北東アジアの経済協力の中で北朝鮮の動向が非常に重要であり、北朝鮮を研究する意味としては、北東アジア経済協力は経済現象である以上、ポスト冷戦の産物としての時代的性格を内包している。北朝鮮はひとつの代表性のある事例であり、この研究は北東アジア経済協力研究には欠くことはできないものである。

本論はこのような問題意識をもって東北アジアにおける「図們江地域経済開発」を検証する事にした。図們江地域に位置する中国側の延辺は「図們江地域経済開発」の恩恵を一番受けており、開発が進んでいることを確認した。今後「図們江地域経済開発」の牽引車の役割を果たすことが可能である。さらに、この地域で北朝鮮の動向が「図們江地域経済開発」を左右するといっても過言ではない。そこで、北朝鮮の1965年から80年代までの経済成長に関して検討をし、北朝鮮の経済成長は80年代まで続いたことを確認した。しかし、90年代に入って、北朝鮮は98年までマイナス成長が続いた。それがようやくプラス成長に転換したのが99年である。1999年からは中朝貿易が着実に増え続け、2000年以後は中国が北朝鮮の貿易を主導している時期でもある。本論文はこのような問題意識を持って中朝経済関係を探る。又、中朝辺境貿易における延辺州の役割を検討する。今現在図們江地域での国際協力開発は主に中国、北朝鮮、ロシア3ヵ国が自主モデルを採っていることは否定できない。しかしこのようなモデルは限界が現れているといわざるを得ない。その新しい協力のモデルとしては、中朝琿春－羅先辺境経済貿易区を設置することであり、もうひとつのモデルとしては中ロ琿春－ハサン辺境経済貿易区である。その二つのモデルが競い合うことにより、結局は二つの経済貿易区を統合することである。このことが図們江地域経済開発の成功に繋がることを筆者は提案する。